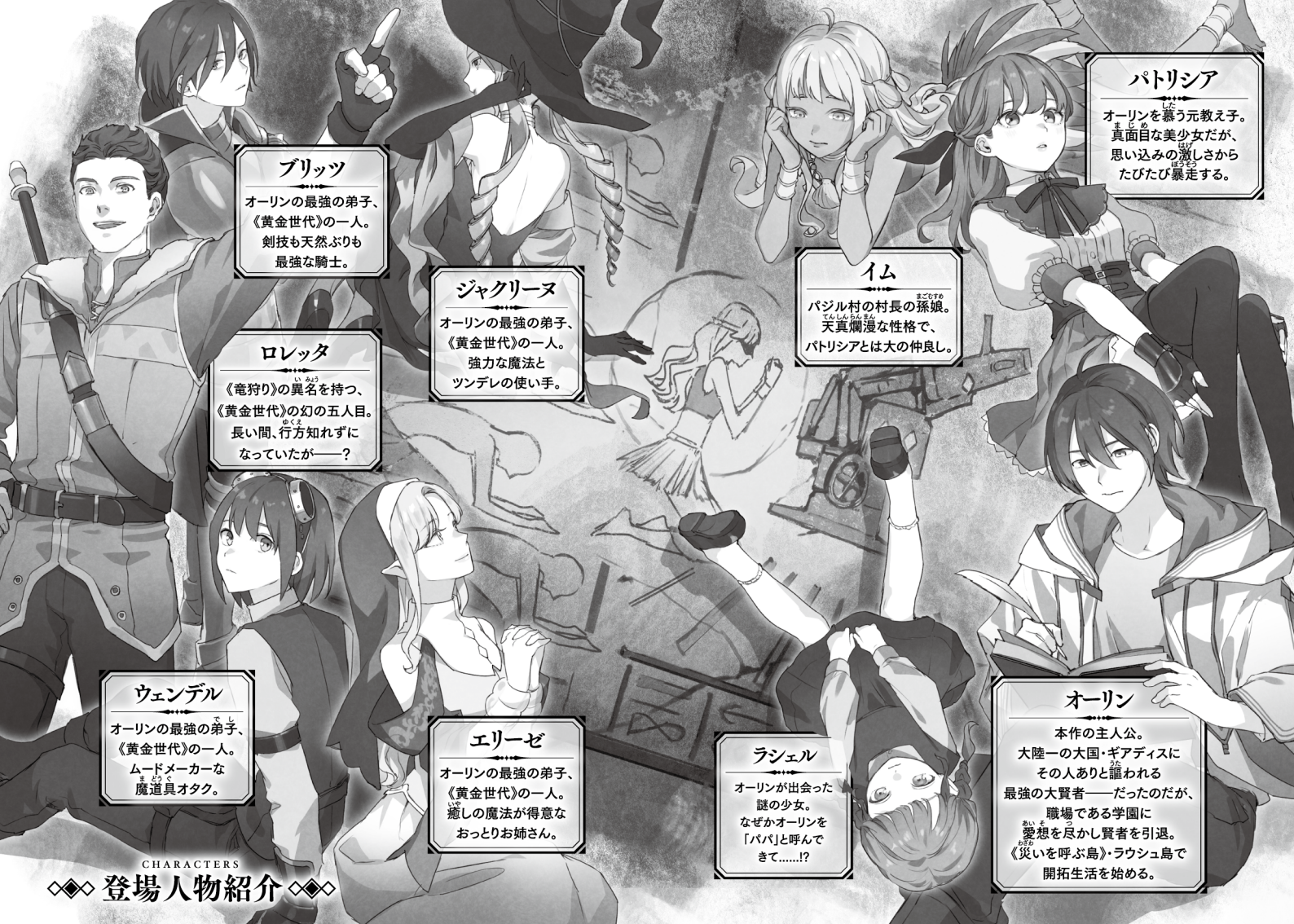




# 引退賢者は のんびり開拓生活をおくりたい 4

α L P H α L I G H T

鈴木竜一  
*Suzuki Ryuichi*



### パトリシア

オーリンを慕う元教え子。  
真面目な美少女だが、  
思い込みの激しさから  
たびたび暴走する。

### ブリッツ

オーリンの最強の弟子、  
《黄金世代》の一人。  
剣技も天然ぶりも  
最強な騎士。

### ジャクリーヌ

オーリンの最強の弟子、  
《黄金世代》の一人。  
強力な魔法と  
ツンデレの使い手。

### イム

バジル村の村長の孫娘。  
天真爛漫な性格で、  
パトリシアとは大の仲良し。

### ロレッタ

《竜狩り》の異名を持つ、  
《黄金世代》の幻の五人目。  
長い間、行方知れずにな  
っていたが——？

### ウェンデル

オーリンの最強の弟子、  
《黄金世代》の一人。  
ムードメーカーな  
魔道具オタク。

### エリーゼ

オーリンの最強の弟子、  
《黄金世代》の一人。  
癒しの魔法が得意な  
おっとりお姉さん。

### ラシェル

オーリンが出会った  
謎の少女。  
なぜかオーリンを  
「パパ」と呼んで  
きて……!?

### オーリン

本作の主人公。  
大陸一の大国・ギアディスに  
その人ありと謳われる  
最強の大賢者——だったのだが、  
職場である学園に  
愛想を尽かし賢者を引退。  
《災いと呼ぶ島》・ラウシュ島で  
開拓生活を始める。

CHARACTERS

◆◆登場人物紹介◆◆

## 第1話 嵐の後で

大陸の最南端に位置するエストラーダ王国の近海にある不思議な島——ラウシュ島。  
地元の人たちからは《災いを呼ぶ島》なんて言われている曰くつきの島で、俺——オーリンと教え子のパトリシアが上陸した時はほとんど何もなかったのだが、今ではすっかり人が増え、とても賑やかになっていた。

特に最近では、俺の元教え子であり、黄金世代の中でも幻の五人目と言われたロレッタも合流。

ロレッタは、同じく学園時代の教え子であるブリッツ、エリーゼ、ウエンデル、ジャクリースたちと切磋琢磨していたが、ある事件をきっかけに自ら学園を去ってしまい、それから強力な地底竜さえ単独で討伐してしまうほどの高い戦闘力を生かして冒険者をしていたという。

ずっと行方が分からなかったが、こうして再会を果たすことができ、今ではこの島の一員として欠かせない存在となっている。

ロレッタは今日もブリツツと、ロレッタに憧れて島の探索に参加を希望した複数の冒険者たちを連れて、早朝から拠点を出ていた。

いつもならダンジョン探索へと向かうのだが、今日は先日発生した嵐による、土砂崩れの被害状況を確認するために可能な範囲で島を見てまわっている。

一方、俺を含む残りの調査隊メンバーは、嵐の影響で荒れてしまった農場を元通りにするため、やはり早朝から汗を流して農作業へ取り組んでいる。

「なんとか今日中に終わらせたいな」

ラウシュ島の調査隊の人数が増えたため、作業効率は大幅に向上していた。

特に中心となってくれたのはエストラダ王国騎士団の若手三人組バリー、カーク、リシダに加え、魔法使いのルチアら若い世代だ。

「よし。こんなところか」

「バリー、次は新しい畑の準備に取りかかるうよ」

「嵐でダメになってしまったところを埋めないとね」

「私が地属性魔法でサポートするわ」

それぞれが協力し合って作業をハイペースに進めていく。

彼らに刺激を受けたのがターナー率いる職人軍団だ。

「俺たちも若い連中には負けてられないな」

「……おっ！……」

力自慢の職人たちが、ターナーの的確な指示に従って、農場の整備の作業をこなしていった。

普段は農業をしないが、こうした経験も増えているため、何をどうすればいいのかという手順も明確になっており、スムーズに次の作業へ取り組める理想的な状況だった。

メンバーの活躍のおかげで、作業は想定していたよりもずっと早く進み、昼過ぎにはひと通りの作業を終えることができた。

「ふう、たくさん動いたから汗をかきましたね」

「パトリシア！一緒に風呂入ろうー」

「ええ。すぐに支度をしましう、イム」

すっかりイムとの入浴に抵抗がなくなったパトリシア。

ちなみにイムは、このラウシュ島にあるバジル村の村長の孫娘だ。

嫌というわけじゃないが、同性とはいえ裸を晒すのは恥ずかしさがあつたらしい。今ではそれもすっかり慣れてしまったというわけだ。

「わたくしたちもいただきますでしょうか、エリーゼ」  
「そうですね」

「あつ、じゃあ僕も——」

そう話すジャクリヌとエリーゼに加わるウェンデル。

「……………」

「ちよつと！　なんで睨みつけるんだよ、ジャクリヌ！」

「タイミング的にわたくしたちと一緒に入ろうとしているように聞こえたので」

「えっ？」

「ご、誤解だよ、エリーゼ！」

あつちはあつちで盛り上がっているな。

「オーリン先生、タオルをどうぞ」

「おつ、ありがとう、クレール」

後からこの島の調査に合流した、ラウシュ島を研究する学者であるクレールは、今や島の調査員兼秘書として活動していた。

家事全般が得意だという彼女は本当に頼りになっている。

そんなクレールと、元生徒たちの若者らしいやりとりを眺めていたら、背後から声をかけられた。

「オーリン先生、少しよろしいですか」

「ドネルか。どうした」

振り返ると、そこに立っていたのは商人のドネルだった。

「実は想定以上に野菜の収穫量がありまして」

「ええ。保存用に残しておいてもかなり余裕があるようなので、ここはひとつ港町に本店をしてみてはどうでしょう」

「出店？」

つまり野菜の店を出すってことか。

ドネルの言うように、人数が増えて畑の規模が大きくなるにつれて収穫できる量も増えてきたのだが、それよりも意外だったのは野菜の成長力だった。

さまざまな野菜を育ててきたが、大陸側に比べて育つスピードが速く、質もいい。土壌が関係しているのか、それとも他に何か要素があるのか、とにかく上質な野菜がたくさん実るのだ。

おかげで貯蔵庫はいっぱい。

しかも、畑にはまだ収穫待ちの野菜もある。

その中にはこの島の環境でしか育たないものも存在していた。

「確かに消費しきれないものもつたいないな。だからといって野菜の生産を止めるのも心

配だ」

嵐は連続して発生することもあるらしいから、畑では常に何かを育てておきたい。かといって、このまま収穫した野菜を腐らせてしまうのはもったいないので、俺はドネルの提案を受け入れることにした。

「出店といっても、すぐには難しいだろう？」

「そうですね。店舗の準備に関してはこちらでやっておきます」

「助かるよ。保存用に取ってある野菜から手をつけて、商品用にはその日に収穫されたものを持っていくでしょう」

これは大陸側の人たちにラウシュ島を知ってもらういい機会だ。

最近は少しずつ災いの島という呼び名がただの噂であると広まり始め、少なくともエストラダ国民の間では誤解が解けつつある。

今回の出店で、それを完全に解消したいところだ。

ドネルは自身が所属する商会からの了承と手助けを得るため、一度大陸側へと渡った。そんな彼を見送った後、俺は詰め所へ戻ろうとしたのだが、森からこちらへと近づいてくる人影が視界に入って足が止まる。

「うん？ あれは……」

よく見ると、それは肩を落として歩くブリッツとロレッタ。ふたりの後ろには同行していた冒険者たちの姿もある。

「せ、先生、ただいま戻りました」

神妙な面持ちで報告するブリッツ。

調査には数日かかる見込みとし、長期戦も覚悟していたようだったが……随分と早い帰還となったな。

ブリッツの表情を見る限り、どうも不本意な結果に終わったらしい。

「何か報告をしたそうだな」

「ええ。少々厄介な事態でして……」

あのブリッツがそこまで言う事態か。

これは相当面倒なことになっているようだな。

「分かった。続きは俺の執務室で聞こう」

俺は全員にそう提案したが、さすがに全員では数が多すぎるので代表者であるブリッツとロレッタのふたりに絞って話を聞くことにした。

場所を拠点の執務室へと移し、早速ブリッツからの報告を受ける。

嵐による土砂崩れが発生しているという目撃情報があったため、ブリッツたちに詳しい

現状の調査を依頼していた。

「発生した土砂崩れはこちらの想定以上の規模でした」

壁にかけた地図へ土砂崩れの発生場所をチェックしていく。

「想定よりも広範囲に被害が出ているんだな」

それが俺の第一印象だった。

さらに、直接現場を目の当たりにしたロレッタが続ける。

「道が寸断されている箇所もありました。島を調査していくなら、早急に手を打つべきでしょうね」

「ダンジョンへの影響は？」

「今のところ確認はできていません」

「そうか……そちらはやはり実際に中へと入ってみなければいけないか」

「入口がふさがれたって事態になっていたら最悪でしたが、なんとかそれは回避できていくようでした」

「それはよかったですね！」

ロレッタからの報告に喜ぶクレール。

俺もホッと胸を撫で下ろす。

あそこはこの島の謎を解く大きなヒントになるかもしれないからな。

だが、内部の方で影響が出ているかもしれないし、まだ油断はできないか。

「すぐにも土砂を除去して道を元通りにしておきたいな」

「作業自体は難しくないのですが、いかんせん人手が足りなくて」

ブリッツの話はもともとだった。

これはつまりは魔法や魔道具でどうにかできるものでもないしな。人力で土を運びだす必要が出てくるだろうから。

「ターナーたち職人には農場や港の整備をやってもらいたいから、現場へ派遣するわけにもいかないし……やれるだけの人数で対処するしかないか」

ダンジョン探索のために冒険者を募集してはいるが、今のところまだ増員はない。

まあ、島外の人間とのやりとりはまだ慣れていないパジル村の人たちの件もあるし、急性に人を増やすのは望ましくない——そうグローバーに伝えたのは俺なわけだから仕方がないのだけだ。

ちなみにグローバーもまた俺の教え子で、今はエストラダ王国騎士団の一員として、この島との連絡役を務めてくれている。

やはり、ここは俺たちで土砂の除去作業をするしかないだろうな。

俺としても、嵐のせいですと詰め所にもつていて体を動かしたいと思っていたし……あと、それは俺だけでなく、パトリシアやイムも同じだ。

新しく人も増えてその対応ばかりだったから、最近はまだ島奥まで調査が行えていないという現状もあり、体を動かしたがっていたからな。

そんなわけで、早速お風呂上りのふたりを執務室へと呼びだした。

「土砂の除去作業ですか……モンスター討伐とかではないんですね」

新しい魔法を試したいと語っていたパトリシアにとっては少々もの足りない案件か。

「まあまあ。これも大事な島調査の『一環だぞ』」

「うっ……確かにそうですね。私、頑張ります！」

気持ちを変えた様子で、気合を入れるパトリシア。

一方、イムの方は最初からヤル気満々だった。

「通れない道があると村のみんなが困っちゃうもんね」

彼女の行動の根底には、この島に暮らす人たちの思いが込められている。それは初めて会った時からまったく変わっていないな。

「よし。バリーヤルチアたちにも声をかけて、現場に行くとするか」

とにかく、まずは現場をチェックしてみなければ始まらない。

仮に、俺たちだけではどうにもならないという事態になればグローバーにも相談した方がよさそうだしな。

「そうと決まったら——パトリシア、イム、みんなに声をかけてここに集めてくれ」

「はい！」

「では、私はその間に夕食の準備をしておきますね」

「よろしく頼むよ、クレール」

まずはイムとパトリシアのふたりが勢いよく部屋を出ていった。

よほど外に出られるのが嬉しいらしい。

その後、クレールはペコリと頭を下げ、静かに退室。

「はっはっはっ！ あの元気の良さは俺たちも見習わなくちゃいけないな、ブリッツ！」

「ふっ、そうだなロレッタ」

元気よく走っていくパトリシアとイムを男子ふたりは微笑ましく見送っていた。

俺としてはイムとパトリシアには、もうちょっとクレールのような慎重さというか、落ち着きを持ってもらいたいと思っているのだが

……まあ、その辺はもうちょっと年齢が上がつてくるとついてくるのかもしれないな。それにしても……土砂崩れか。

厄介な事態にならないといいけど。

## 第2話 思わぬ発見

ブリッツたち黄金世代組が調査を行っているダンジョン近くで発生した土砂崩れ。どれほどの規模なのか確認するため、俺、ブリッツ、ロレッタ、ジャクリースが現場に向かってみると――

「ひどいな……思っていた以上だ」

被害はかなりのものだった。

幸い、近くでダンジョン探索をしていた者たちに怪我などはなかったが……こりゃあ、下手するとダンジョン内部にまで影響が及んでいそうだな。

「ここまでの規模になると、グローバーに話を持っていた方がいいかもしれない」

素人が下手に手を出すよりは、専門家を招集した方がいいだろう。幸い、調査の拠点となつている俺たちの村やバジル村に悪影響が出る位置ではないし。

「ダンジョン探索については、続行しても大丈夫ですかね？」

そう尋ねてきたのはロレッタだった。

「どうだろうな。それを判断するためにも、一度ダンジョン内部に入ってみる必要がある

そうだな。土砂が入り込んでいないか、慎重に調べてみてくれ」

「了解！」

ロレッタからすればようやく本腰を入れて調査できるっていう時にこれだからな。出鼻を挫かれた感はあるのだろうが、それでも調査再開のために気合十分といった感じか。

俺たちは手分けして現状の把握へと乗り出した。

「こちら側の道は、以前訪れた湿原地帯に続いているのか」

「そこでしたら別ルート確保が可能です。少し遠まわりにはなりますが」

「安全の代償としては安いものだ。当分はそちらを使おう」

ブリッツたちと一緒に土砂崩れによって発生する影響について考えながら見てまわる。昼過ぎとなったので、気温も上昇してきているが、まだところどころ足元はぬかるんでおり水分を多量に含んでいた。

これからさらに土砂崩れが起きる可能性もあるため、俺たちはいったんその場を離れることに――と、

「む？」

俺は大量の土砂の中に何かを発見する。

それが気になり、ゆっくりと近づいてみた。

「これは……本？」

埋もれていたのはなんと一冊の本だった。それを拾い上げると、他のメンバーが集まってきた、「なぜ土砂の中に本が？」と俺と似たような疑問を口にする。

確かに、土砂の中に本があること自体かなりおかしい状況ではあるが……それと同じくらい不思議なのが、本の状態だった。

土砂の中にどれほど埋まっていたかは不明だが、まるでついさつき本棚から引っぱり出してきたと思うくらい綺麗だったのだ。

同行してくれているジャクリヌが調べたところ、どうやらこの本には魔力でコーティング加工が施されているらしく、それのおかげで汚れたり破れたりすることなく完璧な状態を保っていたという。

——問題は、それほど大事に守られていた本の内容だ。

ページをめくってみると、

「なっ!？」

思わず声をあげる。

本には文字がびっしりと書かれている——が、まったく読めない。

「どうやら、魔法文字を利用した暗号文のようですわね」

ジャクリヌの指摘通り、こいつは間違いなく魔法文字だ。

ということは……誰かに見られたらまずい内容ってことか？

「ジャクリヌ、解説は可能か？」

「時間がかかるかもしれませんが……できますわ」

「なら、すぐに頼む」

「分かりましたわ」

俺は本をジャクリヌに渡すと、再び土砂へ視線を送る。

もしかしたら、土砂崩れが起きる前、あの場所には何か建物のようなものがあった、それが土砂崩れで破壊された結果、土砂の中に埋もれてしまったのではないか。

そう仮説を立てたわけだが……だとすると、これは悠長に構えていられる案件ではないのかもしれない。

意外なところからこの島の謎を解くヒントが出てきたな。

「大至急、グローバーへ連絡を入れないと」

急遽予定を変更し、俺は村へ戻ることにした。

想定以上だった土砂崩れの規模。

二次被害を防ぐため、グローバーと通信用の水晶で連絡を取るため一度拠点へと戻ってきた。

『なるほど。思っていたよりも深刻な被害が出ているようですね』

「怪我とかの類<sup>たぐい</sup>じゃない分、まだよかったのだが……この先の調査を考えると、早いうちに手を打った方がよさそうだと判断してな」

『ですね。分かりました。こちらから専門家を派遣しましょう』  
「助かるよ」

これで土砂の除去作業については対応の目途<sup>めど</sup>が立った。

後は例の発見について報告をしないと。

「それともうひとつ……これは島の謎を解く大きなヒントになるかもしれない発見なのだが」

『ほ、本当ですか!? ——つと、すみません。取り乱しました』

「気にしなくていいさ。そういった反応をするだろうかと予想はしていたし」

『うっ……オーリン先生には敵<sup>かた</sup>いませんな』

ははは、と苦笑<sup>にがわら</sup>いをするグローバー。

彼の人柄は、昔から変わっていないな。

『それで、発見というのは?』

「実は——土砂の中から魔力によって守られている謎の本が出てきたんだ」

『本……ですか?』

「それもただの本じゃない。魔法文字で書かれていて、俺では解読できなかった。今は

ジャクリーヌに依頼しているよ」

『魔法文字……魔導書の類でしょうか』

「なんとも言えないな」

ため息を交えながら、そう語る。

あの本に関しては本当に見当もつかない。

この島について語られていることに期待したいのだが……果たしてどこまで解読できるか。

ジャクリーヌでさえ手こずるようなら、俺たちではもう手に負<sup>お</sup>えなくなる。

とりあえず、グローバーへ伝えたいことは伝えられた。

早速、明日の朝一から王都内の業者に連絡を取り、早ければ午後にも人員を島へ送ると約束してくれた。

これで作業<sup>はぎ</sup>も捗<sup>はか</sup>る。

できれば一ヶ月以内には復旧を目指したいからな。

連絡用水晶から魔力を遮断<sup>しゃだん</sup>した直後、パトリシアとイムが執務室へとやってくる。

「先生、夕食の準備ができましたよ」

「ありがとう、パトリシア、イム。すまないな、手伝ってやれなくて」

「大丈夫ですよ。クレールさんも手伝ってくれましたし」

「みんなで料理するの楽しかったよね！」

「ええ。勉強になりました」

料理か……確か、黄金世代ではエリーゼとロレッタが得意だったな。

会話をしながら一階へ向かうと、複数人でも食卓を囲めるようにと大きめに作ったテーブルにたくさんさんの料理が並んでいた。

「おお、豪華じゃないか」

「島で育てた野菜に飼育している鶏の卵、さらにお魚やお肉も全部この島のものですからね」と、パトリシア。

まさにラウシユ島フルコースつてところか。

食材の豪華さも目につくが、何よりパトリシアとイムの料理の腕が着実に上達しているという点にも感動を覚える。

農場の管理を終えて戻ってきたバリー、カーク、リンダ、ルチアも加わり、大陸側へ渡っているドネルを除けば全メンバーが揃った。

全員が席につき、ようやくディナーが始まる。

「うん！ これはうまい！」

「本当ですか！ その魚のムニエルはクレールさんにやり方を教わりながら私が作ったん

ですよ！」

誇らしげに語るパトリシア。

そんな難しい料理にまで挑戦できるほど腕を上げていたとは驚きだ。

「先生、こつちも食べて！」

そう言ってイムが差し出したのは肉料理。

ふむ。

パトリシアが魚料理でイムが肉料理……なんとなくイメージに合うな。

後はやはりクレールの指導力も高く評価しなければ。

「教え方もよかったみたいだ。感謝するよ、クレール」

「パトリシアちゃんもイムちゃんも熱心でしたからね。教え甲斐がありましたよ」

ここでも一生懸命だったか。

あのひたむきさは俺も見習わないとな。

ふたりの料理を堪能していると、隣から何やら賑やかな声が聞こえてくる。

「ロレッタ、ウエンデル。肉ばかりじゃなく野菜も食え」

「あなたたち……もしかしてひとり暮らしをしている時もそんな偏った食生活を？」

ブリッツが言うと、ジャクリーヌもロレッタとウエンデルの二人を呆れ顔で見る。

「肉を食わなくちゃパワーが出ないだろ？」



「そうだよ。ふたり揃って親みたいなこと言わないでよ」

「だ、誰が夫婦ですって!？」

ウエンデルの言葉に過剰<sup>かじょう</sup>反応するジャクリヌ。

「そうは言っていないんだけどなあ……」

「ふふふ、このやりとりも変わらないわね」

最後にエリーゼが口にした言葉が、まさに俺の今の気持ちだ。

みんな成長して大人っぽい見た目になったし、個々のレベルは着実に上がっている。それでも、中身はまだまだ学生時代の名残<sup>なごり</sup>があるように映った。

特にロレッタが合流してから名残<sup>なごり</sup>がより強くなっていると感じるな。

そもそもこの島に来るまで忙しさもあり、卒業後ほとんど顔を合わせていなかったようだからな。この島はちょうどいい同窓会の機会にもなっているようだ。

楽しい夜の食卓はその後も賑わい続けたのだった。

+

次の日。

王都からの応援が来るまでの間、俺たちで可能な限りの除去作業を続けようということ

になった。

俺は念のため拠点に残り、農場や港の様子をチェックしつつ今後の対応について考えることに。そのため、作業にはイムとパトリシア、さらに黄金世代と冒険者たちをお願いしておいた。

彼らを見送った後、早速仕事へ取りかかるため拠点を出た。

まずはなんと言っても——農場だろう。

島へ来た当初、パトリシアやイムと一緒に作った畑。

それは場所を移し、ふたりの住まいの裏庭に用意された。

ここで栽培される野菜については、当初は商品にするのではなく、俺たちで消費して自給自足にしようと考えていた。

だが想定以上に野菜の育ちが早く、おまけに質もいいときている。

ドネルからの提案もあり、商会を通して王都での販売を計画していた。

昨夜、その話をバリーたちにしたところ、彼らは張りきって今日も早朝から農作業に勤しんでいる。

「カーク！ リンダ！ ルチア！ 王国騎士団の名にかけて、必ずや評判のいい野菜を育てて売ろぞ！」

「なんだかだんだんと騎士らしくない方向へ進んでいるような気が……」

「まあまあ。これも立派な任務だよ、カーク。それに農作業っていい筋力トレーニングになると思わない？」

「私もリンダさんと同意見ですね。最初は魔法使いとしての道を外れているような気がしましたが、苦手だった地属性魔法の扱いが上達してきているので、まったく無駄というわけではないと思いますよ」

「た、確かに……体力はついてきたかなあ」

リーダーであるバリーを中心にして、四人は楽しそうに作業をしていた。

ここは彼らに任せておいて問題ないだろう。

しかし……トレーニングか。

その単語を耳にして真っ先に浮かんできたのはパトリシアとイムだ。

昨日は料理の腕の上達に感激したが、最近では剣術や魔法の鍛錬における成長ぶりも素晴らしい。

俺以外にもブリッツやジャクリーヌといった優秀な師匠——いや、あのふたりの場合は年齢や立場的に先輩の方がしつくりとくるか。

ともかく、ふたりの存在も非常に大きいと俺は考える。

「オーリン先生！ ドネルはまだ戻ってきませんか！」

ふたりの可愛い弟子の近況を思い出していると、バリーの叫び声で現実へと引き戻される。

「まだ来ていないようだ。というより、向こうでいろいろと出店に向けた準備をしているから、そうすぐには戻ってこれないんじゃないかな」

「むう……それならば仕方ありませんね」

「バリーはせっかちすぎだよ」

リンダの言葉に、俺も賛同する。

「リンダの言う通りだ。それに、向こうで売るのは野菜だけとは限らないし、そっちの準備もしていないと」

リンダに指摘され、「たはは」と照れ笑いを浮かべるバリー。

そして、カークの言葉はこの島にあるもうひとつの産業を思い出させてくれた。

それは畜産。

現在は鶏を飼育しているが、まだ数羽程度のため農場に比べて規模は小さい。

こっちは生き物を扱うということもあって、農場の野菜よりも応用が利かず、慎重に進めていかなければならない。

ただ、飼育体制が安定すれば畜産にも力を入れていきたい。

今後は牛や羊なども育てていきたいし、森の一部を伐採して歩きやすい道を整備しよう

と考えているため、馬も用意したい。

そう思うと、こちらもまだまだレベルアップが見込めるな。

後は動物の生態に詳しい人物も招集したいところだが……まあ、その辺は土砂崩れの問題が解決してからでよさそうだな。

産業面といえば、海の実在は欠かせないだろう。

今、職人たちが力を注いでくれているのは港のさらなる整備——ここは大陸側とのやりとりもあるため急ピッチで進められていた。

こちらは職人たちのリーダーであるターナーが中心になってくれている。

時折、王都にある造船所のマリン所長を招き、何やらいろいろと話し合っていた。船を利用した物資運搬のさらなる効率化を目指しているらしい。

あと、やはりこれほどの海原を見ていたら漁業にも力を入れたいというのが俺とターナーの共通認識だ。

実際、エストラダ王都にある港には漁師がたくさんおり、水揚げされた早朝なんかは大変な賑わいを見せている。あれほどの規模でなくてもいいが、この島で漁業が成り立たないか試してみる価値はあると思った。

ひと通り回り、執務室へ戻ってくると、まるでタイミングを計っていたかのごとくグ

ローバーから水晶を通して連絡が入る。

『オーリン先生、今お時間よろしいでしょうか』

「大丈夫だが、何かあったのか？」

『いえ、例の土砂除去のための人員が今日の午後にそちらへ到着しますので、その報告を』

「そうか。無理を言ってしまったてすまないな」

『いえいえ。今度、俺もそちらへ様子を見にうかがいますね』

「ぜひ来てくれ。ブリッツたちも喜ぶよ」

『ありがとうございます。では、これで失礼します』

若いながらもすでにエストラダ王国騎士団の中では上の地位についているグローバー。忙しいだろうに、俺たちを気にかけてよく連絡をくれる……律儀な性格だな。

その後は午後の時間を使って村の産業に関する今後の方針をまとめたのだが……想像していたよりも視野は広く持てそうだという結論にたどり着く。

それらを完璧にこなせるようになれば、大陸側とこの島の距離は一気に縮まるだろう。

実現のためには何よりもまずはこの島の謎を解くことだな。

何もかもが謎だらけのラウシュ島……実は、パジル村の人々が居住していること以外で

明確に分かったことはひとつもなかった——ただ、少しずつではあるものの、全容の輪郭くらいはうっすらと発覚しつつある。

後はまだ調査の及んでいない地域へ進むだけだが、それを実現させるには万全の準備と人員が必要になってくる。

「さて……どこまで分かることやら今後の調査が、この島とエストラダの未来に大きく関わる。

まだまだ課題だらけではあるが、それだけは断言できた。

+

その日の午後。

クレールが用意してくれた昼食を食べ終えると、外で軽く運動をしていたら海の向こうに船が見えた。

「あれか」

グローバーが手配してくれた土砂対策の専門家たちを乗せた船だろう。

クレールと共に港へと移動し、ターナーたちにも連絡を取って彼らを迎え入れた。

先頭を切って島に上陸したのは、大柄でスキンヘッドの男性だった。

「初めまして。地形学の専門家として、王国の環境管理を任されているラドニー・ヤートムです」

「ラウシュ島調査団のリーダーを務めます、オーリン・エドワースと言います」

「おお、あなたが噂に名高いギアデイスの賢者様でしたか」

「昔の話ですよ。ラドニーさんは元エストラダ騎士団の方だそうで」

「ははは。それこそ昔話ですな。今はもう引退して第二の道を進んでいる真つ最中ですよ」

俺とラドニーさんは握手を交わしながら軽く自己紹介をする。

それから彼の部下が船から土砂の除去作業に必要な積み荷をおろしている間、この島についての注意事項などを伝えておいた。

大陸側の人間にまだ慣れていないパジル村の人たちともいるしな。

「ラドニーさんはエストラダの出身ですか？」

「ええ。生まれも育ちもエストラダです。なので、今日は幼い頃からずっと気になっていたこの島に足を踏み入れることができて年甲斐もなく気分が高まっていますよ」

以前、クレールも似たようなことを言っていたな。

「現場はここから遠いんですか？」

「歩いて一時間ほどでしょうか」

「ふうむ……出発の準備にかかる時間も考慮すれば、本格的な土砂の撤去作業は明日からになりそうですね」

すでに昼過ぎだし、日が暮れて視界が悪くなってからの作業は危険だ。

彼らにはリスクを極力減らして万全の状態で作業に取り組んでもらいたいため、その予定を受け入れた。

ターナーたち職人とも協力して荷物をおろし、それらを馬車の荷台に載せて出発。長い時間をかけて移動し、ついに例の土砂崩れ現場へと到着。

「これは……かなりの規模ですね」

現場をひと通り見てまわったラドニーさんがそう告げる。プロが見ても相当ひどい有り様ってわけか。こちらでも作業には時間がかかりそうだな。

すると、ここでロレッタがラドニーさんへ質問する。

「この近くにダンジョンがあるのですが、そこを探索することは可能だと思いますか？」

「ダンジョンか。見たところ冒険者のようだが……悪いことは言わない。やめておいた方がいいだろう」

ラドニーさんはキッパリと言いきった。

「ダンジョン内部がこの辺りまで通じている可能性もある。最悪の場合、内部で崩落でも

「もちろんです……では、やはり断念せざるを得ないですね」

ロレッタは、俺たちだけでは攻略が難しそうなこの島のダンジョンを調べてもらおうと呼んできたわけだが、まさかこのような事態になるなんて。ロレッタには悪いことをしてしまったな。

「気に入らないでくださいよ、先生。みんなにも会えましたが、今後二度と足を踏み入れられないというわけじゃないんですから」

ラドニーさんも、土砂の除去作業が終わり次第、職人たち数人と共にダンジョンへと入って内部を調査するという。

「ラドニーさんや君たちがいるなら、調査では頼もしい限りだな、ロレッタ」

「これくらい御安い御用ですよ。それより、これからどうします？」

冒険者たちは探索する場所であるダンジョンを土砂崩れによつて奪<sup>うば</sup>われる形となり、手

そこでロレッタを中心に据え、ラドニーさんたちの手伝いに回ってもらうことにした。

ただ、彼らは冒険者としてこの島に来ているため、不満も出るだろう。

それを想定し、俺は彼らを集め、代表者として説明をする。

「みんな、集まってもらって申し訳ないが……しばらくダンジョンへは入れそうにない」  
怒号が飛び交うことも覚悟していたが、そこはロレッタを慕う冒険者たち。

突然の事態にもまったく動じていなかった。

「作業は俺たちも手伝いますぜ！」

「さっさと終わらせて、ダンジョンに行こう！」

「そうと決まったら早速作業開始だあ！」

「ああ、頼むよ」

「おお！」

冒険者たちはみんな協力的だった。

これもすべてはロレッタの日頃の行いがよかつたからだろうな。

意欲満々の冒険者たちに対し、先行していたウエーデルが「作業をするならこいつを使ってくれないかな」とアイテムを渡して言った。

「ウエンデル、それはどんなアイテムなんだ？」

見た目は土砂などをかきだすためのスコップなのだが……あのウェンデルお手製ということは必ずどこかに仕掛けがあるのだろう。

実際にひとりの冒険者がスコップを持って地面に差し込んでみると、その違いに目を丸くしていた。

「め、めちゃくちゃ土が軽い!? どうなっているんだ!」

「作る時にちよつとね」

さすがは王国でも屈指の魔道具技師。

今回もいい仕事をしてくれたようだ。

しかし、そのスコップは素材不足もあって三つしか作れなかったという。

なので、冒険者たちの中でもパワーに自信のない、いわゆるスピードタイプの者にスコップを使ってもらい、大半のパワー自慢にはそのまま挑戦してもらうことにした。

彼らは文句のひとつも言わず、自分のやるべきことをキッチリ丁寧にこなしていく。

せっかく冒険者としての専門職で力を発揮してもらおうとしたのだが……申し訳なさを感じつつ、俺は他のメンバーにも今後の行動について伝え、ラドニーさんたちの指示に従いながら作業を進めていく。

それからしばらく作業を進めていると、ラドニーさんが大量に積まれた土砂の中から何

かを発見する。

「おや? これは……」

それを手に取り、不思議そうに眺めていたので俺もチェックしてみることに。

どうやら例の魔法文字が書かれた本ではないようだ。

「オーリン先生、こいつはなんだと思います?」

「うーん……木材のようですね」

明らかに人の手によって加工された木材が、土砂の中に紛れていた。この日は職人であり、建築分野の専門家でもあるターナーも援護に来てくれたので早速これを彼の元へと持っていく、分析してもらうことに。

「これは……形状やサイズから察するに、おそらく家屋に使われていたものではないでしょうか」

「やはりそうか」

「でも、これってこの辺りではあまり普及していない工法ですよ。大陸内でもごく一部の国でしか使用されていません」

さすがは若き天才職人。

木材ひとつでそこまで分かるのか……俺たちだけでは気付けなかった事実だな。

ただ、これで土砂崩れが発生する前、この近辺に建築物が存在していたのは確定した。

おまけにターナーの話ではかなり限定的な工法であるらしい。

ここから、なんとかこの島にいたとされる者たちの正体しょうたいに近づけないだろうか。

あの難破船なんぱせんも、以前発見した記念硬貨も、この島に潜ひそんでいると思われる「謎の存在」の正体を確定させるには至らなかつた。

分かつたのはレズン王国元副騎士団長のオズボーン・リデアという人物の名前のみ。

彼がどのようにこの島と絡からんでいたのか、その決定的な理由についてはまだ何も分かつてはいない。

もしかしたら、今回発見された本やその家屋とやらも、オズボーン・リデアに関するものではないだろうか。

「オーリン先生、どうかしましたか？ 顔色が悪いです」

「い、いや、なんでもないよ、パトリシア」

「……本当ですか？」

俺の体調不良を疑うたがっているな、パトリシア。

そういえば、ギアデイスで教師をしていた頃、熱があるけど無理して仕事をしていたら彼女に怒られた時があつたな。

「俺なら本当に心配ないよ。ちよつとこの下にあつたとされる家屋について考えていただけだからね」

「そ、そうだったんですね。よかった……どこか怪我でもされているのではないかと心配になりましたよ」

「おいおい、俺はそんなにヤワじゃないぞ？ パトリシアも知っているだろう？」

「そ、それはそうなんですけど……」

言い返されてムツと頬ほを膨はくらませるパトリシア。

これ以上いじめるのはよろしくないな。

「土砂の除去作業を続けよう。もしかしたら……この島の謎を解く大きなヒントが眠ねむっているかもしれない」

俺の呼びかけに、パトリシアは静かに頷うなずき、他のみんなも作業へと戻っていく。

果たして、この土砂の下には何が埋まっているのか。

その正体を突きとめるため、俺たちも全力で作業へと当たつた。

### 第3話 新たな情報あらと発見

土砂の除去作業は一日でかなり進んだ。

中でも活躍したのはブリッツとジャクリースだ。

作業するのに邪魔となる巨岩は、ブリッツの剣術で粉々になり、人間の力だけでは動かしづらい堆積した土砂はジャクリーヌの無重力魔法で運搬していった。  
ふたりの活躍ぶりに、島へ来た専門職の方たちも「大助かりですよ」と賛辞を送る。  
おかげで土砂の量はかなり減ったが、例の木材以降は特に目立った発見はなかった。

「すでに流されてしまったか、あるいはもつと深くに埋もれていたのか……」

夕焼けの中、俺は腕を組んで考えていた。

「難破船で上陸した者たちが建てたものである可能性は高いが……」

ハッキリとしたことは何も言えない。

ヒントとなりそうなのは、ジャクリーヌに解説を依頼している本だ。

そのジャクリーヌから、これまでに解説された部分について報告があった。

「例の本ですが……どうやら日記のようです」

「日記？」

「はい。まず、最初のページを解説した結果ですが……逃亡中、嵐に巻き込まれてこの島にたどり着いたという内容でした」

「っ！ それがああ難破船というわけか……」

それと、新しい情報が手に入った。

## 立ち読みサンプル はここまで

「あの難破船……何者かから逃げてきていたのか」

「もしかして、凶悪犯罪者とかでしょうか……」

声を震わせながらバトリシアが言う。

そうなると、この島に凶悪犯が存在していることになるが——おそらく、それはないだろう。

「うーん……元レゾン王国騎士団の人間であるオズボーン・リデアに関するアイテムが多く見つかったことから、おそらくそれはないだろう」

「なら、そのリデア副団長が誰かに追われていたってこと？」

「そう考えた方が自然かもな」

俺もウエンデルと同じ考察をしている。

オズボーン・リデア元副騎士団長は何者かに追われていた。

そしてこの島にたどり着き、ずっと生活していたのか……いや、もしかしたら島から脱出をしたのかもしれないが、それならエストラダ王国が気付くはず。

となると、リデア元副騎士団長はこの島ですでに亡くなっている？

俺がこの島にやってきてから、だいぶ様子は変化しているはず。

大陸側から人がやってきたとなったら、すぐにでも飛びついてきそうなものだが……あるいは本当に人前へは出られない理由があるのだろうか。